

まちっこプロジェクト

松戸市医師会健康啓発委員会 川越 正平



要旨

松戸市医師会では平成27年度から Matsudo Child to Community Project (通称まちっこプロジェクト) を行っている。本事業では、医師会員が市内小中学校で健康教育授業を行い、授業内容を周囲の大人に伝えることと授業内容についてインタビューすることを宿題としている。両親などが子供と一緒に宿題に取り組むことで、周囲の大人の健康意識も向上させる試みである。つまり本事業は子供たちに健康教育授業をすることで子供たち自身の知識や認識を高めるだけでなく、波及効果によって地域社会全体の健康意識を高めることを目的としている。

現在「命の尊さ」「認知症」「感染症」についての授業を行っており、プロジェクト開始後、令和元年度末までに計61小中学校、9441名が授業を受けている。またアンケート調査からは大人への波及効果も認められている。本事業では多職種がグループワーク型授業のファシリテーターとして参加している。事業を通じてきたいわゆる「顔の見える関係」が臨床現場でのスムーズな連携につながっており、強固な地域包括ケアシステムの構築に役立っている。

1. 背景と目的

松戸市医師会では、平成27年度より「Matsudo Child to Community Project」通称「まちっこプロジェクト」という事業を始めている。これは医師会員が市内小中学校へ赴き、健康教育授業を行うものである。本プロジェクトの特徴は、両親や祖父母など周囲の大人に授業内容を伝えることと、授業内容についてインタビューすることを宿題としていることである。宿題により授業を受けた子供だけでなく、周囲の大人への波及効果を狙っている。

松戸市は千葉県北西部に位置し、江戸川を挟んで東京都に接している。昭和40年頃から東京都のベッドタウンとして人口が急増し、近年は約50万の人口を擁する大きな市である。年少人口割合は12%、高齢化率は26%程度で、市内には市立小学校45校と中学校20校があり、約3万4000人の小中学生が学んでいる。また松戸市医師会は236医療機関・419人の医師により構成されている(図1)。

生活習慣病治療において健康教育は欠かせないものだが、十分な成果を実感できていない医師は多くないであろう。また「こんな状態になるまでなぜ受診しなかったのか」と思わせる患者に遭遇することも珍しくない。その様な状況の改善を願い、市民一人一人が健康意識を高め、適切な時期と方法で医療を受けてほしいという思いが、本プロジェクトを始めた動機である。そして普段は医療者との接点がない人達に対しても効果的なアプローチを模索した結果、子供を通じて大人に働きかける方法に思い至った。

さらに、普段は自分の健康について意識することがない大人も、子供からの忠告には耳を傾けるだろうと考え、本プロジェクトの特

徴である子供に健康教育を行いその内容を子供から周囲の大人に伝えてもらうという基本構想を得ることになった。このように、まちっこプロジェクトの目的は、授業を受けた子供だけでなく、その家族やさらには住民全体の健康意識を高めることである。

【Child to Communityという考え方】

発展途上国での公衆衛生教育において、Child to Childという手法が広く行われている。これは年長の子供に手洗いの重要性を教育し、年長の子供から年少の子供へ知識を伝達させるという方法である。また子供に減塩教育を行うことにより親の食塩摂取量を減らせたという報告1) や子供への禁煙教育により父母の行動変容がもたらされたとの報告2) があり、Child to Parentという手法の有効性も示唆されている。これらは子供を地域社会の重要な構成員と捉え、その能力を積極的に活用しようとするものである。

この考えをさらに進めて、子供に健康教育を行うことで地域社会全体の意識を向上させるという考え方をChild to Communityと名付け、その実践として本プロジェクトを行っている(図2)。

2. 活動内容と成果

【活動実績】

「命の尊さ」と「認知症」をテーマにした授業プログラムを独自に作成し、平成27年度に本プロジェクトは始まった。初年度は3小中学校・1014名に対して授業を行い、平成28年度7校・1250名、平成29年度15校・1878名、平成30年度14校・1737名、令和元年度22小中学校で3567名に対して授業を行った(表1)。平成27年から令和元年度末までに累計61小中学校、9441名に対して授業を行っている。また認知症授業は平成30年度から認知症サポーター養成講座を兼ねており、小中学生の認知症サポーター1979名を養成した。

令和2年度はCOVID-19の流行に伴い学校での活動が著しく制限され、実際に訪問授業を行うことは断念せざるを得なかった。このため小学5年生から中学3年生を対象として、新たに「感染症」をテーマにした授業を構築し、モデル授業を録画したDVDとテキストを市内全小中学校に配布した。受講対象者は約2万人となり、その両親に波及効果があるとすると、約6万人に対して健康教育を行ったことになる。これは松戸市人口の1割以上に相当し、実際に感染予防効果が見込めると考えている。

【授業内容】

現在「命の尊さ」「認知症」「感染症」をテーマとしたプログラムがあり、表2の4つのねらいを踏まえた授業を行っている。「命の尊さ」の授業ではがんに関する基本的な知識を教え、がん治療におけるアドバンス・ケア・プランニングの重要性や在宅医療について解説している。「認知症」の授業では、基本的な知識の他に認知症者と非認知症者の共生が大切という考えを伝えている。またどちらの授業でも「障害により不便ではあっても、不幸ではない状況にはできる。そのために周囲の協力が必要」というメッセージを伝えている。COVID-19流行に対応するため令和2年度

図1 松戸市の概要

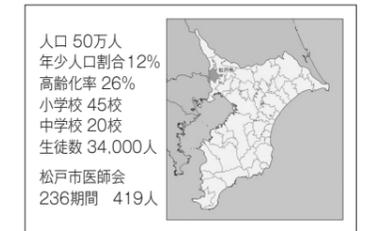


図2 Child to Communityの概念

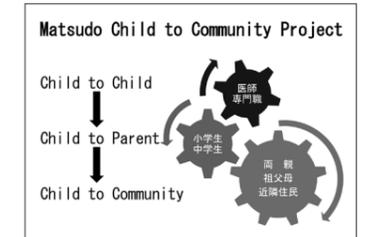


表1 プロジェクトの活動実績

命の尊さ 講義型 グループワーク型	認知症 講義型
H27年度校 3校	1,014名
H28年度校 7校	1,250名
H29年度校 15校	1,878名
H30年度校 14校	1,737名
R1年度 22校	3,567名

表2 まちっこプロジェクト4つのねらい

1. 健康とは自ら守り育むものであり、そのために知識や行動が大切になる
2. 自分や家族の重大事を決めるために、日頃から家族内で相談を積み重ねておく
3. 地域社会における地縁などコミュニティでのつながりを深めていく
4. いのちや家族の健康について相談することのできる「かかりつけ医」等を持つ

作成した「感染症」の授業では、具体的な感染予防法やCOVID-19の特徴などを解説し、感染者に対する偏見・差別の問題などにも触れている。

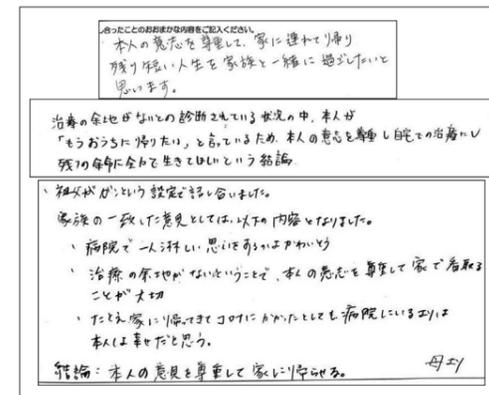
「命の尊さ」の授業では講義を聴くだけの講義型だけでなく、講義を受けた後にモデル事例についてグループ討論するグループワーク型の授業を行っている。討論を通じて自ら考えることによって、子供たちの理解がより深くなると考えている。

【宿題】

前述したように、まちっこプロジェクトの特徴は授業後の宿題にあり、周囲の大人に授業内容を伝えることと授業内容に関してインタビューすることを宿題にしている。授業後にスライドをまとめた冊子を配布し、それを使って授業内容を伝達するよう指導している。そして「がんで余命半年（または認知症）と診断されたらどこでどのように過ごしたいですか」などのテーマでインタビューすることを宿題としている。小中学生には難しすぎる課題と懸念していたが、子供たちは一生懸命に取り組んでくれている。

プロジェクトの最終目的は子供たちの周囲にいる大人の健康意識を高めることなので、子供達が課題を果たすことにより、初めて目的が達成される。よって本プロジェクト成功

図3 感染症授業宿題プリント



の鍵は授業を受けた子供たちが握っている。そのため授業では「君たちが主役」「君たちは素晴らしい能力を持っている」などの言葉で子供たちを鼓舞するように心がけている。

感染症の宿題では「末期がんと診断された祖父母がCOVID-19流行により面会できない状況で入院している」という設定で人生会議を開くことを課題とした。宿題プリントには、子供たちの考えだけでなく保護者たちの意見が記されたものも多数あり、周囲の大人にも健康教育を行うという我々の目的が十分に達成されていると確信している(図3)。

【医師会が事業を行うということ】

松戸市ほどの大規模自治体でこのような事業を行うには、教育委員会と市役所の協力が不可欠であった。授業を行うには各学校との調整が必要だが、教育委員会が仲介することによりスムーズな意思疎通が可能になった。さらに教育委員会職員が医師会会議に定期的に参加して、事業運営や授業スライド作成に助言している。市役所はテキスト作成費など経費の一部を負担し広報活動にも協力している。

グループワーク型授業では、ケアマネジャー・訪問看護師・民生委員・市役所職員など多職種がファシリテーターとして参加している。このような多職種協働体制が得られたのは、医師会という組織が事業を行うこと

で行政や他職種から信頼されたためである。事業を継続的かつ広範囲に展開していくためには、一人の医師の情熱・努力では不可能であり、医師会という組織が責任を持って事業を行うことが肝要であった。

本プロジェクトでは、松戸市医師会が作成した共通スライドに各講師が独自エピソードを付け加えて授業を行っている。これはスライド作成に関わる講師の負担を軽減するとともに、授業の質を一定に保つためである。共通スライドを使うことにより、特殊な講演技術を持った医師ではなく、当たり前の臨床経験を持った医師が講師を担える仕組みになっている。

【成果】

プロジェクトの効果を検証するため、授業を受けた生徒の保護者に対するアンケート調査を行っている。保護者に対するアンケート調査では、授業前後でリビングウィルの作成率が上昇するなど、Child to Parentの効果が示されている(図4)。

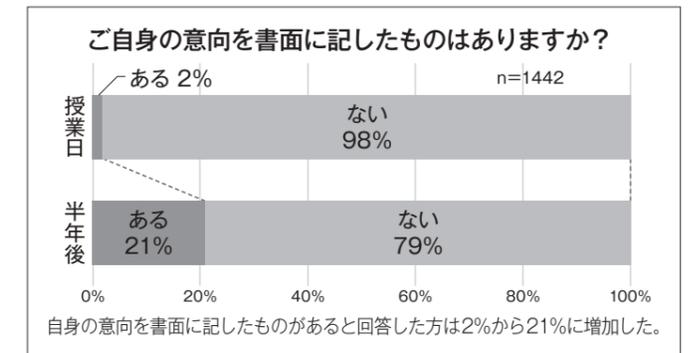
前述したように、本プロジェクトは様々な職種が協力して行っている。多職種が同じ事業に取り組むことによりいわゆる「顔の見える関係」が形成され、臨床現場でのスムーズな連携に役立ち、強固な地域包括ケア体制の構築に資する活動にもなっている。

3. 今後の展望

今後は実施校と授業テーマをさらに増やすことを目標としている。その際は医師会員だけでなく他職種にも講師として活動してもらう予定である。また他地域の行政職員や医師会員の授業見学を積極的に受け入れており、同様の試みがあればノウハウを提供・共有している。

近年、学校の問題解決のために地域の人材を活用しようという流れがある。医療に関することなど専門的な授業に外部人材を活用

図4 保護者アンケートの結果



するということは、そのような流れの中に位置付けられ、本プロジェクトは先駆けとなる取り組みである。

先述したように、このプロジェクトの鍵は授業を受けた子供たちである。子供たちの力が地域の発展に役立ち、そのことを子供たち自身が実感できれば子供たちのさらなる成長につながるはずである。医療界と教育界の両方に意義ある事業として発展させたいと考えている。

【おわりに】

我々は授業を通じて子供たちの真剣な表情や素直な反応に触れることで、プロジェクトの意義を再認識しただけでなく、普段の診療では味わえない種類の喜びを感じている。将来を担う子供の教育に関わることは、そのこと自体が楽しいものである。また前述したように、本プロジェクトは地域包括ケアの輪を強化することにも役立っている。そしてその輪の中に子供達を巻き込むことができれば、さらに質の高い地域包括ケアシステムを構築できると夢見ている。本報告書の読者により、同様な試みが各地に広がることを期待している。

1) He FJ, Wu Y, Ma J他 : A school-based education program to reduce salt intake in children and their families (School-EduSalt) : protocol of a cluster randomized controlled trial. BMJ open 2013 Jul 16;3 (7)
 2) 堤円香、中村明澄、前野貴美他 : 小中学生への喫煙予防教育と父母の行動変容との関連—子供の言葉は親を変えるか。日本プライマリ・ケア連合学会誌.vol.36,no.4 : [291-296],2013



授業風景